

# 多言語・多文化 教育研究

Multilingual Multicultural Education and Research

URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>

特集

## 多言語・多文化社会の課題に迫る!

多文化協働実践研究・全国フォーラム(第1回)開催(12月1日~2日)



第9回ブラジル田舎まつりIN上田(写真上:ブラジルの格闘技カポエイラを披露する若者たち)の一角で精神科医の阿部裕さんが「こころの相談」コーナーを開設(写真右)。

今年9回目となる「ブラジル田舎まつりIN上田」が9月9日、上田市旧第一中央グラウンドで開催されました。フォークダンスやカポエイラのプレゼンテーションなど賑やかな催し物が行われている隣の中央公民館では小児科、内科、歯科、労働法、ビザ取得代行、教育などの相談ブースに並んで、今年には本センターの協働実践研究班の一つ「阿部・井上班」による「こころの相談」コーナーが設けられました。当日は3組の相談者が訪れ、本学特任研究員で精神科医の阿部裕さんが相談に当たりました。

1990年の入管法改正以来、ブラジルやペルーを初めとする日系人が製造業を主産業とする地域に集住するようになり、2001年に設置された「外国人集住都市会議」の会員都市数は現在では23に上っています。こうした地域では生活、労働、医療、福祉などの問題に加えて子どもの教育やこころの問題が顕在化する中で行政の取り組みも様々に行われるようになりました。一方で国際結婚の急増などにより全国的に多国籍化・

多文化化が進み問題はさらに複雑化してきている中で、行政施策がなかなか進まない地域もあります。

本センターでは昨年度からこうした多言語・多文化化する日本社会の課題解決をめざして、外国人問題に詳しい実務家や研究者に本学の特任研究員を委嘱し、「協働実践研究」活動を展開しています。現在テーマ別に6つの班に分かれて活動していますが、その発表の場として10月~11月に各班がそれぞれプレフォーラムを、また12月1日(土)~2日(日)には全国の実践者・研究者が一堂に会する場として、本学で「多文化協働実践研究・全国フォーラム(第1回)」を開催します。

全国フォーラムでは調査研究の成果を報告するだけでなく、全国各地で活躍されている実践者や研究者が集い、多文化化する日本社会の諸課題に取り組むための情報発信と共有、ネットワーキングをする場になればと考えています。

みなさまの奮ってのご参加をお待ちしております。

### No.5

2007(平成19)年10月

#### CONTENTS

- P.2…【研究】外国につながる子どもたちへの取り組みから見えてくるもの
- P.4…【研究】多文化協働実践研究・全国フォーラム(第1回)日程
- P.6…【教育】学生が大活躍!多文化コミュニティ教育支援室の活動から
- P.8…【社会連携】コーディネーター養成プログラムが始まります。ほか



## 【研究】外国につながる子どもたちへの取り組みから見えてくるもの

上田市との協働実践研究活動から 阿部・井上班



長野県上田市における外国人登録者は5,846人（2007年4月1日現在）。総人口167,325人うち3.5パーセントにあたり、さらにその内半分近くをブラジル出身者が占めます。また、外国籍の学齢児童生徒数は、425人で、公立の小中学校に通う外国籍児童生徒は、299人にのぼります（2007年）。こうした子どもたちの教育に関して上田市では日本語や学校の習慣を教える「虹の架け橋」というプレスクールを設置したり、生活面の相談に対応するた

めに市の相談窓口にもポルトガル語ができる相談員を配置したりしています。また同時に、市内の企業・市民団体と連携して「上田市外国籍市民支援会議」を2005年に立ち上げ、多文化共生のまちづくりを推進しています。

この上田市との協働で実践研究活動を行っているのが、精神科医の阿部裕さんと日本経団連の井上洋さん（兩人とも本学の特任研究員）を中心とした「阿部・井上班」です。7月から10月にかけて数回にわたって上田市を訪問し、外国人労働者を受け入れている製造会社や、上田市に暮らす日系ブラジル人家族へのヒアリング調査を手分けして行ってきました。また、9月9日に行われた「ブラジル田舎まつり IN 上田」には外国人のための「心の相談」コーナーを設け、阿部裕さん自らが相談に当たりました。

阿部さんは自身がスペインに留学していたことをきっかけに1990年以降、日本

に住む日系人の診療に携わり、2006年3月に自ら多言語対応のクリニックを開業しました。臨床の現場で外国につながる子どもたちが様々な問題を抱えていることを知り、将来の日本社会の担い手である子どもたちへの支援体制づくりを呼びかけています。日系人とはいえブラジルとは全く違う日本という異文化社会で生活する子どもたちには、どのような心の問題が生じているのでしょうか。相談の間に阿部さんに聞きました。



ブラジル田舎まつり IN 上田のようす

### ●心の支援活動● 四谷ゆいクリニック院長 阿部裕さんへのインタビューから



**Q：外国とつながりのある子ども達を診察する上で難しい点は何ですか。**

阿部：言語が絡んでくるので状態が見えにくいことです。たとえば軽い自閉症の子どもが本当に障害があるのか、あるいはただ言葉の問題でそのように見えるだけなのかどうか、判断が難しいところ。また、どのような対応、支援をすればよいのかの見極めが難しいという点もあります。

**Q：具体的にはどのような支援をされていますか。**

阿部：まず発達障害が絡んでいるかどうかを見分けます。障害が絡んでいない場合は学校や保護者へ連絡を取り、本人が安定できる環境を作ってもらおうにします。症状がある場合は療育を受ける必要がありますが、地域によって療育方法が異なったり、場所の確保などが問題になってきます。そのため学校や保健所と連携をしながら、よりその子どもにあった療育を施していくことが大切です。

**Q：支援する上で難しいことはありますか。**

阿部：親御さんが日本語でコミュニケーションをとれないことです。せっかく支援をしようとしても学校や児童相談所とコミュニケーションを取ることができず、情報が行き渡らないことがしばしばです。たとえばクリニックには5カ国語に対応した医療専門通訳が常時いますが、そうした人材が地域においても求められています。また支援をする側が言葉や文化、習慣のことを配慮しながら子どもに接することが大切です。

**Q：子ども達の家庭環境についてどう思われますか。**

阿部：日系人の大半は仕事を求めて自らの意志で来日し、滞在中は少しでも高い賃金を求めて国内を移動する傾向が見られます。そのため子ども達の発育環境は頻繁に変わることが多く、特に来日後2、3年はアイデンティティの危機を覚えることがしばしばです。また日本での生活がある程度長くなると子どもの日本語能力はより早く上達するため、親子の間で会話が成立しにくいことも起きてきます。

「阿部・井上班」の上田市におけるインタビュー調査は、阿部チームが日系ブラジル人家族のヒアリングを、また井上チームが地元企業へのヒアリングを担当し、手分けして実施していますが、これらの調査から様々な課題が浮かび上がってきています。

全国フォーラムの分科会ではこれらの調査結果の一部も報告します。

## 川崎市ふれあい館との協働実践研究活動から

佐藤・金班

もう一つ、外国につながる子どもたちへの取り組みについて実践研究を進めている班があります。川崎市ふれあい館と協働する「佐藤・金班」です。

神奈川県川崎市ふれあい館では外国につながる中学生のための学習サポートに取り組んでいます。戦前から在日韓国・朝鮮人が多く住むこの地域では、さまざまな取り組みがおこなわれてきました。

90年代になると、南米やフィリピン出身の人々が増加し、それとともに川崎市ふれあい館にはフィリピンにつながる子どもたちが多く訪れるようになりました。現在では学習支援ボランティアが不足する状況になっています。

外国につながる子どもたちの教育に長年関わってきた東京学芸大学国際教育センター教授の佐藤郡衛さんと川崎市ふれ

あい館職員の金迅野さん（兩人とも本学特任研究員）が中心となって協働実践研究を進める「佐藤・金班」では、こうした地域における活動に注目し、地域と学校の連携による新たな仕組みづくりを模索しています。

川崎市ふれあい館で長年学習支援活動に携わってこられた原千代子さん（研究班研究協力者）にお話を伺いました。

## ●外国人児童生徒への学習支援活動● 川崎市ふれあい館 原千代子さんへのインタビューから



原 千代子さん

**Q：今はどのようなお子さんたちが学習サポートを受けに来ていますか。**

原：非漢字圏出身の子が中心で、とくに2003年頃からは国際結婚をした外国人女性の子どもたちが増えていました。今年は川崎市総合教育センターとの連携でタガログ語でのチラシを作成したところ、これまで5人にいたフィリピンの子どもに更に4人のフィリピンの子どもたちが通いはじめました。

**Q：具体的にはどのような指導に当たっていますか。**

原：昨年は受験指導を中心に行いました。神奈川県には外国人特別募集枠を設ける高校もあり、そこでの受験科目は数学・英語・国語及び面接です。国語はなかなか難しいのですが、幸いフィリピンの子どもは英語がよくできます。数学は問題文の日本語がわからなくてもパターンで回答できるような問題を中心に指導しました。面接対策はかなり徹底して行い、時には丸暗記させることもありました。

**Q：学校での勉強の様子はどうですか。**

原：日本語サポートを小中学校で受けられるのは半年間だけで、その後は必要に応じての対応となっています。しかしそれだけでは不十分で、実際に子どもは授業が理解できないまま教室に居続けます。こうした子どもたちは自分の進路も見出せないので学習意欲も湧いてきません。また発達途中で突然日本での生活を強いられるため、精神的に不安定な子どももいます。

**Q：ボランティアの教え方や教材は？**

原：子どもたちの状況が様々であるため教材も一様にはいきません。教え方については本来であれば指導者の研修を行い、教案を作り指導に当たるとするのが理想なのですが、現在の体制ではそこまで行うのは難しく各指導者に任せているのが現状です。また指導者は皆ボランティアでの活動であるため定期的・継続的な参加が難しく、支援を必要とする子どもが増える一方で支援者の数が不足しているのは大きな悩みです。

**Q：ふれあい館を巣立った先輩達は？**

原：ここで学習支援を受け、無事高校に進学した子どもが先輩としてサポーターに登録しています。ただ実際に彼らが学習支援にあたるのは難しく、途中で高校をドロップアウトしてしまう子も少なくないことを

考えると高校入学後もまだまだサポートが必要です。今バンド活動をしている高校生グループがありますが、彼らの活動を応援してあげることで少しでも学校内に自分の居場所を見いだしてくれればと願っています。

支援を必要とする子どもが増える一方で支える側が少ないことが大きな課題だという原さんの声を受けて、「佐藤・金班」ではプレフォーラムおよび全国フォーラムの分科会において、川崎市内の都立高校や教育委員会、教員や市民団体のかたがたを交えて地域における連携協働の具体的な方向性について話し合います。また、連携協働での活動を作り出していくために求められる、「コーディネーター」のあり方やその役割についても検討していく予定です。



川崎市ふれあい館で大学生からサポートをうける外国につながる子どもたち

## 総合的包括的な課題解決にむけて —フォーラム開催

現在本センターが推進している「協働実践研究プログラム」ではこうした外国人を取り巻く問題の解決策を見出すために、特任研究員を中心に作られた6つの研究班が、ここで紹介した外国につながる子どもの教育やこころの問題の他、外国人労働者問題、地域日本語教育のあり方、多文化ソーシャ

ルワーカー、コーディネータの専門性や育成の方向性、外国人住民施策における行政区域を越えた連携の模索といったテーマに沿って具体的な実践研究活動を進めています。10月から始まる各班のプレフォーラムと12月の全国フォーラムを通して、それぞれのテーマから見えてくる課題を相互に共

有することによって、包括的複眼的な視野を獲得しながら、各班の協働実践研究活動は次のステップへと進んでいきます。

2008年度の活動へのスタートともなる「多文化協働実践研究・全国フォーラム（第1回）」。全国の皆さまにご参加いただき議論を深めていければと願っています。

長野県上田市との協働で外国人労働者および外国につながる児童生徒をめぐる課題解決に向けて、企業・行政・市民の連携のあり方を検討しています。外国人労働者を雇用する企業や学校、日系人コミュニティなどでの聞き取り、また上田市ブラジル田舎祭りにこころの相談ブースを設けるなどして地域参加しながら活動をしています。

外国人住民を取り巻く課題と地域づくり

—長野県上田市における行政・企業・市民連携の取り組み事例を中心に—

第1部 日系ブラジル人の仕事・暮らし・教育(鼎談)

尾崎ジョージ(上田市に暮らす日系ブラジル人)  
浦野エジソン(本センターフェロー)  
田村太郎(多文化共生センター大阪代表理事)

第2部 日系ブラジル人を取り巻く課題と取り組み(パネルトーク)

パネリスト: 外国籍市民支援会議の取り組み  
小山晃(上田市市民生活部市民課長)  
プレススクールの取り組み  
小野塚究(教育委員会学校教育課長)  
日系ブラジル人の子どもたち  
増田善雄(上田市東小学校長)  
地域の日本語教室の取り組み  
浅井常子(親と子の日本語教室代表)

コメンテーター: 阿部裕(精神科医)  
佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授)

進行: 井上洋(日本経団連産業第一本部長)

日時: 11月2日(金) 13:30-16:30

場所: 文京シビックホール26階スカイホール

定員: 100名(申込順)

阿部・井上班

プレフォーラム

申込: u-forum@tufs.ac.jp



多言語・多文化社会の抱える問題解決には、コーディネーターやソーシャルワーカーなどの人材養成をいかに行うかが重要です。先行研究を紐解きながら、コーディネーター職の現状と課題、求められる職能や機能、専門性や人材養成のあり方について考察を進めています。

多言語・多文化社会の広がりとのコーディネーター

—福祉、学校教育、日本語支援、国際交流協力の現場から—

第1部: 事例報告「日本におけるコーディネーターの実態」

報告者: 疋田恵子(日本ボランティアコーディネーター協会運営委員)  
宮村育代(杉並区教育委員会指定学校教育コーディネーター)  
宮崎妙子(武蔵野市国際交流協会日本語学習支援コーディネーター)  
丹下厚史(名古屋国際センター交流協力課主査)

進行: 山西優二(早稲田大学文学学術院教授)

第2部: ディスカッション

「多文化社会に求められる人材像とコーディネーターの専門性」

パネリスト: 上記報告者4名  
発題者: 杉澤経子(本センタープログラムコーディネーター)  
小山紳一郎(かながわ国際交流財団情報サービス課長)

進行: 山西優二

山西・小山班

プレフォーラム

申込: c-forum@tufs.ac.jp

日時: 10月26日(金) 14:30-17:30

場所: 早稲田大学国際会議場

定員: 100名(申込順)

大木班

弁護士の大木和弘さんだけで構成されている、ちょっと変わった班があります。大木さんが長年に渡って関わってきた市民による外国人相談ネットワークのあり方を、地域の仲間達とともに見直ししながら、市民社会と大木さん自身の市民としての可能性と限界について考えていきます。\*大木班はプレフォーラムを実施しません。

「多言語・多文化社会の課題に迫る!」—多

12月1日(土)

10:00-12:00 挨拶 亀山郁夫(東京外国語大学長)  
全体会「なぜ協働実践研究プログラムなのか」高橋正明(本センター長)  
「多言語・多文化社会における諸課題と協働実践研究のアプローチ」  
—班別・研究テーマと活動状況報告(全6班)—

13:00-15:00 分科会 A (※(1)、(2)のどちらか1つを選んで参加)

(1)「日系ブラジル人の適応・定住化と人材育成への展望 —長野県上田市の調査から見てきたもの」

阿部・井上班

第1部 全国の先行事例と上田市におけるヒアリング調査・中間報告  
報告: 企業・自治体・NPOによる取組み先行事例 田村太郎(本センターフェロー)  
上田市地元企業調査 大木義徳(阿部・井上班研究員)  
日系ブラジル人家族の適応調査 石塚昌保(心理士、本センターフェロー)  
堀之内テレーザ(上田市外国人相談員)

第2部 パネルディスカッション

パネリスト: 玉川俊夫(日軽松尾樹総務部総務課長)  
森大和(上田市教育長)  
阿部裕(精神科医本学特任研究員)  
井上洋(日本経団連産業第一本部長、本学特任研究員)  
浦野エジソン(一橋大学大学院社会学研究科フェアレイベー研究  
教育センターシニア・リサーチフェロー、本センターフェロー)

進行: 田村太郎

(2)「なぜ教材開発プロジェクトを行うのか?」

教材作成チーム

パネルディスカッション

パネリスト: 佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授、本学特任研究員)  
大蔵守久(財)波多野ファミリスクール主管  
小林幸江(本学留学生日本語教育センター教授)ほか  
進行: 高橋正明(本センター長、外国語学部教授)

15:15-17:15 分科会 B (※(3)、(4)のどちらか1つを選んで参加)

(3)「自治体および国際交流協会職員に求められる コーディネーターとしての専門性—現場の実践から—」

山西・小山班

第1部 先行研究からみるコーディネーターの専門性分析  
報告者: 加藤丈太郎・細井みどり(本センターフェロー)

第2部 パネルディスカッション

パネリスト: 宮 順子(岩手県国際交流協会主査)  
山口和美(前群馬県多文化共生推進室長)  
阿部一郎(金沢国際交流財団プログラムオフィサー)  
コメンテーター: 山西優二(早稲田大学文学学術院教授、本学特任研究員)  
進行: 小山紳一郎(かながわ国際交流財団情報サービス課長、本学特任研究員)

(4)「地域の特性を生かした日本語プログラムづくりとは? —各地の日本語教室の実践から—」

野山班

第1部 地域日本語プログラム調査・中間報告

第2部 パネルディスカッション

報告: 旗野智紀・山辺真理子(本センターフェロー)  
パネリスト: 田中喜美代(えひめJASL創設初代代表・研究部長)  
今井武(財)石川県国際交流協会専任講師)  
鈴木圭子(足立区区民課多文化共生担当(主査)  
宮崎妙子(NPO法人国際活動市民中心(CINGA)日本語チーム)  
河北祐子(武蔵野市国際交流協会日本語学習支援コーディネーター)  
進行: 野山広(国立国語研究所日本語教育基盤情報センター整備普及グループ長、本学特任研究員)

17:45-20:00 懇親会(大学会館1F)

# 文化協働実践研究・全国フォーラム(第1回)

12月2日(日)

10:00-12:00 分科会 C (※(5)、(6)のどちらか1つを選んで参加)

## (5)「自治体の外国人政策と区域を越えた行政・市民連携の可能性」 渡戸・関班

### 第1部 協働研究・中間報告

報告：町田・相模原調査中間報告 宣元錫・武田里子(本センターフェロー)  
 広域連携の結び目としての外国人相談ネットワーク  
 関聡介(弁護士、本学特任研究員)  
 「スペイン語圏」から見た広域連携ネットワーク 高橋悦子(川崎市日本語指導等協力者)

### 第2部 ディスカッション

パネリスト：上記報告者  
 総括コメント：渡戸一郎(明星大学教授、本学特任研究員)

## (6)「外国につながる子どもたちの教育を地域から育む試み」 佐藤・金班

### 第1部 協働実践研究・中間報告

報告：外国につながりを持つ子どもの教育を地域から育む試み  
 根岸親(本センターフェロー)  
 プレフォーラムの報告 佐藤公孝(川崎市総合教育センター)

### 第2部 パネルディスカッション

パネリスト：井村美穂(豊田市・NPO法人子どもの国代表)  
 古賀美津子(福岡市・よるとも会代表)  
 金迅野(川崎市ふれあい館)ほか  
 コメンテーター：佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授、本学特任研究員)  
 進行：藤田美佳(本センターフェロー)

13:00-14:45 個人/グループ発表 \*発表者募集(下覧参照)

## 15:00-17:00 全体会-パネルディスカッション 「多言語・多文化社会にむけて協働・実践・研究が生み出す ダイナミズム」

パネリスト：協働実践研究班責任者・本学特任研究員  
 阿部裕、井上洋、大木和弘、金迅野、小山紳一郎、  
 佐藤郡衛、関聡介、野山広、山西優二、渡戸一郎  
 コーディネーター：杉澤経子(本センタープログラムコーディネーター)

展示コーナー(2日間とも)：センター関係資料展示ブース、多文化コミュニティ  
 教育支援室発表ブース、書籍販売コーナー

## フォーラム参加者募集

日時：2007年12月1日(土)10:00-20:00(9:30受付開始)、12月2日(日)10:00-17:00  
 会場：東京外国語大学・研究講義棟  
 定員：300名(申込順)  
 参加費：無料(懇親会費3,000円)／宿泊手配は各自で  
 申込：氏名、所属、1日目懇親会参加の有無を明記のうえメール、電話、FAXで。  
[zenkokuforum@tufs.ac.jp](mailto:zenkokuforum@tufs.ac.jp)、TEL:042-330-5441 FAX:042-330-5448

## 発表者募集

形態：個人発表(発表20分 質疑10分)  
 グループ発表(パネルディスカッションを中心に90分)  
 対象：日本の多言語・多文化化の問題に取り組んでいる研究者・大学院生または  
 実践者(自治体・国際交流協会、NPO等の職員)など  
 申込：センターホームページから応募用紙をダウンロードの上、メールで。  
[tc@tufs.ac.jp](mailto:tc@tufs.ac.jp) ※グループ発表の場合、代表者が記入してください  
 締め切り：10月15日(月)必着

外国人施策における行政区域を越えた連携の可能性について調査研究を行っています。研究活動の柱は2つ。東京都町田市と神奈川県相模原市において、外国人施策における広域連携と都県境をまたいだ市民協働の持つ可能性を探ること、および外国人のための相談サービスのあり方の検討です。

## 地方自治体の外国人施策における市民協働の可能性を探る -町田・相模原における広域連携の模索-

基調報告：渡戸一郎(明星大学教授)

第1部：「町田・相模原における外国人相談の現状と課題  
 -先行事例との比較」

パネリスト：

奴田原敏泰(町田国際交流センター外国人相談部会長)  
 柿澤澄夫(さがみはら国際交流ラウンジ)  
 関聡介(弁護士、成蹊大学法科大学院客員教授)  
 進行：塩原良和(本センター運営委員、本学准教授)

第2部：「町田・相模原における外国人住民施策と広域連携の可能性」

パネリスト：

笠原道弘(町田市文化・国際交流財団事務局長)  
 中野 繁(相模原市文化国際課副主幹)  
 片 英治(神奈川県立新磯高等学校長)  
 進行：渡戸一郎(明星大学教授)

日時：11月7日(水)18:00-20:30  
 場所：町田市民フォーラム4F  
 ボランティアセンター講習室  
 定員：50名

渡戸・関班

プレフォーラム

申込:m-forum@tufs.ac.jp

川崎市ふれあい館で実施されている、外国につながる子どもたちの教育の支援のために、学校(小・中・高校)、総合教育センター、大学、当事者OB、OGらが連携して行える協働実践モデルの構築に取り組んでいます。

## 「案・ふれあい・トーク」 -目の前の外国につながる子どもたちに、 わたしたちができることを-

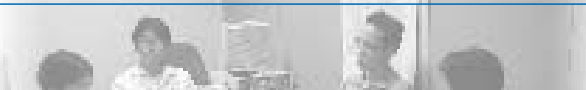
進行：佐藤郡衛(東京学芸大学国際教育センター教授)、  
 金迅野(川崎市ふれあい館職員)

日時：10月12日(金)14:00-16:00  
 場所：神奈川県川崎市ふれあい館 定員：50名

佐藤・金班

プレフォーラム

申込:k-forum@tufs.ac.jp



「地域の日本語教室」は、多くの市民ボランティアによって支えられています。国内のいくつかの先行事例を検討し、多言語・多文化の住民が共に暮らすための場として機能する「地域日本語教育のプログラム」を実際にいくつかの地域と連携しながら実践的に開発していきます。

## 共生のまちづくりに向けた地域日本語プログラムづくり -「のしろ日本語学習会」の実践から-

事例発表者：北川裕子(のしろ日本語学習会教室主宰者)  
 池田理恵(旧名:岩=イェン)  
 (のしろ日本語学習会学習者)  
 藤田美佳(のしろ日本語学習会、本センターフェロー)  
 コメンテーター：高木光太郎(東京学芸大学国際教育センター准教授)  
 石井恵理子(東京女子大学現代文化学部准教授)

コーディネーター：

野山広(国立国語研究所日本語教育基盤情報センター整備普及グループ長)  
 総合司会・ディスカッサント  
 伊東祐郎(本センター副センター長、本学留学生日本語教育センター教授)

日時：11月17日(土)13:30-17:30  
 場所：東京外国語大学留学生日本語教育  
 センターさくらホール  
 定員：100名

野山班

プレフォーラム

申込:n-forum@tufs.ac.jp

# 学生が大活躍!

## 「多文化コミュニティ教育支援室」の活動から

本センター教育プログラムの一環に位置づけられる「多文化コミュニティ教育支援室」では、学生が中心となって「外国につながる子ども達への日本語・学習支援活動」や小・中・高等学校での「国際理解教育活動」を展開しています。今回はこうした活動に取り組む学生達が大学の授業以外の場面で「学ぶ」様子をお伝えしていきます。

### ◆初めての「国際理解教育入門」講座を開催

多文化コミュニティ教育支援室では、7月31日～8月2日の3日間、本学の学生を対象に小中高等学校で国際理解教育の実践に取り組むために必要な視点や考え方を学ぶ「多言語多文化共生学講座Ⅰ 国際理解教育入門」を実施しました。

2日目の「ワークショップ体験」で行われた2つの参加型の学習プログラムの1つ、『ピンクんに何が起きたのか?』は「多文化共生」をテーマとしたワークショップです。日本の中学校に通うベトナム人の少年をとりまくさまざまな問題について、彼の周囲にいる7人の人物への仮想インタビュー（教室の壁に貼られた封筒の中の紙に書かれた言葉）をもとに、「アイデンティティの揺らぎ」「家族のコミュニケーションの不足」「弟のいじめ」「父親の悩み」「難民に対する理解の不足」など、複雑に絡み合った課題を整理し、その解決方法を考えます。最後は、数人ずつのグループに分かれて、自分たちが考えた問題の解決策を発表しました。

受講した学生たちは国際理解教育＝外国文化の紹介という狭いイメージでとらえるのではなく、問題を理解し、その解決について考えることの大切さや、いろいろな見方、考え方を知り、話し合いの過程で理解が深まっていく参加型学習の面白さを実感することができたようです。

#### 多言語多文化共生学講座Ⅰ 国際理解教育入門 日程

1日目 7/31 (火)	10:00-10:30	オリエンテーション
	10:30-12:00	国際理解教育入門 山西優二(早稲田大学文学部教授)
	13:00-16:00	小・中・高等学校における国際理解教育(実践事例の紹介) ①小学校「身近なところから世界につながる授業」 ②中学校「地域の日本語学習者を迎えて」 ③高等学校「国境・文化を超えて交流し、発信する」
	16:10-17:00	ヨーロッパの国際理解教育(ビデオ視聴、教材紹介)
2日目 8/1 (水)	10:00-12:30	ワークショップ体験①「異文化理解」
	13:30-15:30	ワークショップ体験②「多文化共生」
	15:40-17:00	学習プログラムの作り方 「ワークショップ体験」を分析的にふりかえり、学習プログラムの「流れ」や「手法」、ファシリテーション、多文化化が進む地域における国際理解教育の学習プログラムの作り方について考える
3日目 8/2 (木)	10:00-15:30	国際理解教育のプログラム作り 留学生による自国文化の紹介や小・中・高校生を対象とした学習プログラムの案を作成し、発表する
	15:40-17:00	まとめ

開催日:2007年7月31日～8月2日 計3日間

時間:10:00～17:00

内容:①国際理解教育の理念や優れた実践事例を知る。

②国際理解の参加型学習(ワークショップ)を体験、分析する

③国際理解教育のプログラム案を作成する

参加者数:31名(大学院:4名、4年:4名、3年:4名、2年:9名、1年:10名)

### 参加した学生からのコメント

#### ◆門脇 弘典(フランス語専攻・4年)



この講座で学んだことは、日常でも生かせると感じた。結果ではなく過程を重視すること、相手の考えを否定しないこと、自由な発想を大切にすること。これらのことは、社会に出てからも意識すべきことだと思う。まったくもって、国際理解教育から学ばせてもらっているのは、自分たちの方であると再認識した。

#### ◆前島 健(スペイン語専攻・1年)



この3日間を通じて痛感したのは、国際理解教育云々よりも前に自分の頭の固さであった。今までずっと一つの正解だけを追い求める授業ばかり受けていたため、自由に自分の意見を述べる場面になると急に言葉に詰まってしまう。今回の共生学講座では、初めて知ることに加え、「豊かさの基準っていったい何だろう?」という質問のように、改めて意味の重要性を考えさせられることも多かった。今後機会があれば、ぜひここで学んだことを活かしていきたい。



講座参加者が全員集合!



世界の家族写真を眺めると何が見えてくる?

## ◆学生中心の企画に70名を超える高校生が参加 オープンキャンパスでの国際理解教育・学習支援ワークショップ

7月30日に開催された本学オープンキャンパスにおいて、「知る・感じる・考える／こんな身近なところにある『世界!』」と題して多文化コミュニティ教育支援室の活動を紹介するワークショップを行いました。日頃支援室で活動している学生たちが何日もかけてワークショップを準備し、当日参加した延べ70名を超える高校生たちも学生たちの熱意にどんどん引き込まれていきました。

国際理解教育についてのワークショップでは、イラン人の父親をもつ日本ハムのダルビッシュ投手の写真から外国にルーツをもつ子どもたちのアイデンティティについて考え、日本にいる外国人について学生が工夫した教具を使いながら説明した後、「多文化共生社会を実現するために必要なこと」について皆で討論しました。

ワークショップの風景



また外国にルーツをもつ子どもへの日本語・学習支援活動についてのワークショップでは、さまざまなワークを行うことで日本語指導が必要な子どもについて理解した後、小学校の算数の教科書で実際に使われている文章を「やさしい日本語」に言い換えるためにはどうしたらよいか皆で考えました。また実際に日本語・学習支援活動をしている学生や帰国子女の学生の体験談も紹介され、高校生だけではなく保護者の方も一緒に考えたり意見を述べたりしました。ワークショップが終わった後も残って学生と話していく高校生もおり、学生による運営の良さが十分に出た充実した企画となりました。

## ◆現場教員と考える

### MIA(武蔵野市国際交流協会)夏期教員ワークショップへの参加

7月25～27日の3日間 MIA夏期教員ワークショップ「教室の多文化と国際理解教育」が行われました。その最終日7月27日(金)の「いっしょにつくろう!国際理解教育プログラム!～多様なリソースとの出会い」に多文化コミュニティ教育支援室は全団体の一つとして参加しました。支援室からは、これまで学習支援や国際理解教育に関わってきた学生4名(日本人学生2名、留学生2名)が参加し、それぞれの体験や実践を通して感じてきたことを話しました。学

現場の教員と話し合う  
中国からの留学生(左)

生たちは、教員の方々と今現実に教室で起こっている様々な問題について話し合い、何が今必要なのか、また自分たちにどのようなことができるか意見を出し合いました。学生たちにとっても、改めてこれまでの活動を振り返る機会になったと共に、現場の教員の方々と直接意見を交換できる貴重な体験になりました。

## ◆現場を知る スタディ・ツアーから生まれた日本語学習支援活動の輪

在日コリアンが多く住む街として知られる川崎市桜本地区で6月30日(土)にスタディ・ツアーを実施しました。本学学生・職員合わせて20名ほどが桜本地区の人々の歴史や生活について学び、川崎朝鮮初級学校や川崎市ふれあい館を訪問して地域の日本人住民やニューカマー外国人住民との共生の取り組みについてお話を伺うなど、大変有意義な一日となりました。

後日、川崎朝鮮初級学校から支援室に、来日して間もない韓国人児童のための日本語学習支援ボランティアを紹介してほしいという要請がありました。また同じ川崎市にある橘高等学校からも、中国から来日した生徒のための日本語学習支援ボランティアの紹介依頼があり、その申し出に応じてくれたのがスタディ・ツアーに参加した学生たちでした。また川崎市ふれあい館が実施しているニ

ューカマーの子どもに対する学習支援教室にも、以前のスタディ・ツアーに参加した支援室の学生が参加することになりました。このようにスタディ・ツアーの実施をきっかけに川崎市における支援室の日本語学習支援活動の輪が広がっています。

### ◆スタディ・ツアーに参加して◆

加藤 総子  
(大学院 地域・国際専攻1年)

9月から週1回、川崎朝鮮初級学校の韓国人児童に日本語を教えています。今年6月に行われた川崎スタディ・ツアーで、以前から興味があった朝鮮学校を訪問し、そのときのご縁で日本語ボランティアを始めることになりました。いま教えている生徒が日本での生活を楽しめるように工夫しながら、学習支援を進めていきたいです。

## Add-on Program「言語技能入門」 2学期は言語別に開講!

日本の多言語・多文化化する社会について学ぶ本学の新しい教育プログラム「Add-on Program多言語・多文化社会」は「入門」、「法・政策」の他、今年度より「歴史」、「社会・文化」、「言語とコミュニケーション」、「言語技能」を開講しています。多文化社会においてコミュニティ通訳として求められる知識・スキルを学ぶ「言語技能」では、1学期に教育、司法、医療、行政など各分野で活躍される方を講師にお招きしました。続く2学期では、英語、スペイン語、ロシア語、中国語、朝鮮語、日本語(外国人学生用)の6つの言語に別れコミュニティ通訳に必要な語彙、表現などを勉強していきます。そのうち、英語を担当される前田さんに、授業開講に当たったの豊富を寄せていただきました。

寄稿

## 通訳業に求められるもの



前田 節子

15年間通訳・翻訳業に従事し、40歳にカウンセラー資格取得のため3年間渡英した経緯を振り返ると「通訳時代に、カウンセリング手法を少しでも知っていたら、仕事や対人関係がもう少し楽だった」という思いがあります。

通訳業は、地道な日々の積み重ね以外に、文化や人の気持ちに寄り添う為の言葉選びがとても大事です。通訳をする為には、語学力以外に、自己肯定力や、内容を理解している事が不可欠です。自己肯定力が高いと、自分の否

を認め、訂正し、その気持ちを引きずることなく、次の文章に集中できますし、分野の内容を理解していると相手の伝えたい事を素直に言い換える事ができ、積極的に人・仕事に係われるようになります。

こうした思いを背景に、今回は参加型講義を計画しています。講義は毎回、英語でコミュニケーション・通訳や日常生活に必要なコミュニケーション技法と知識にフォーカスし、ワークショップ形式で進めていきます。「I invite you to join me!」

Add-on Program「多言語・多文化社会」  
「言語技能入門II・英語」担当  
心理カウンセラー 前田 節子



## 「多言語・多文化社会に必要とされる新たな職種としてのコーディネーター養成プログラム」が始まります。

このプログラムは、文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」として採択されたもので、2007年8月から2010年3月までの2年半をかけて、プログラム開発を目的に、本センターで実施することになりました。今年度はコース開講に向けて準備をし、来年度の開講をめざします。今後、詳細を逐次ニュースレターで紹介していきますので、みなさまのご協力ご参加をよろしくお願いいたします。

### 【事業の趣旨と概要】

日本社会の多文化化の進展にともなって、企業や学校および地域社会では、これまで経験したことのない様々な問題に直面するようになりまし。こうした課題を解決するには、異なる言語や文化面の理解、共に生きるための施策や教育、こころの問題など幅広い知識と、多様な団体または専門家とのネットワーク構築や連携協働のスキルを有した人材として「コーディネーター」の養成が必要となってきています。実際に、企業・行政・学校・国際交流協会など様々なところで、すでにコーディネーター職が設けられるようになってはいますが、そのための人材育成プログラムは未だ開発されていません。

そこで、本センターでは、多文化社会に貢献できる人材としての「コーディネーター養成プログラム」を次の要領(予定)で開発・実施します。

#### 対 象

- ・外国人受入施策に関わる企業・行政・国際交流協会の社員・職員
- ・外国人児童生徒の支援に携わる教職員
- ・地域で日本語支援や相談活動を行っている市民団体の中心スタッフ

#### コース概要

- ・基本的に社会人を対象とし、夏期の集中講座と年度末のフィードバックおよび評価講座の2段階に分ける。
- ・基礎コースと分野別コースの2種類を用意する。分野別コースではさらに3コースを用意する。



## 外国人のためのリレー専門家相談会へ本学教職員・院生が通訳として参加



9月22日(土)、NPO法人CIN-GAの主催による「外国人のための都内リレー専門家相談会」が開かれ、本学からは通訳として10名(教員6名、職員1名、大学院生3名)が参加しました(左写真)。この相談会は、「東京外国人支援ネットワーク」に加入している都内の自治体、国際交流協会、専門団体、NPOが毎月1、2回、交替で主催しているものです。

センターは昨年4月に同ネットワークに加入し、昨年度は16名(延べ人数)の本学教職員が3回の相談会に参加しました。今年度は、大学院生を含め新たに13人がボランティア通訳として

登録し、現在の登録者数は24名(教員11名、職員3名、大学院生10名)となっています。また言語数も増えて、英語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、中国語、朝鮮語、インドネシア語、フィリピン語、ベトナム語、タイ語、トルコ語の11言語になりました。しかし、本学が擁する人材からみれば、まだまだ少数であるのも確かです。

通訳ボランティアの登録者に対しては、相談会に関する説明のほか通訳の役割や心構えなどに関する事前研修をセンターで行っており、今年7月25日に開催して13人が参加しました。



相談会のようす



## 「多言語多文化—実践と研究」投稿原稿募集

研究誌『多言語多文化—実践と研究』を発行するにあたり、現代日本における多言語・多文化化を直視し、それと切り結んでいこうと試みるあらゆる領域の執筆者による投稿を歓迎します。原稿の字数は25,000字以内、第1号への投稿締め切りは1月15日です。詳細は本センターのホームページをご覧ください。

## 【研究】センター第2期フェロー決定

センターでは、新進の研究者や実践者に実践的研究活動のキャリア形成を支援するため、「センターフェロー制度」を設けています。現在17名がセンターフェローとして活躍していますが、新たに第2期センターフェロー2名が決定しました。

氏名	所属
石塚 昌保	四谷ゆいクリニック・心理士
山辺真理子	立教大学非常勤講師

(委嘱期間:2007年10月1日から1年間)

### ◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

小学校の頃、運動が得意な子、勉強が得意な子、絵が上手な子いろいろな同級生がいましたが、お昼休みになると皆一斉に校庭で遊びました。「楽しむ」ことを目標に自然と「協働」ができました。大人になると目指すところは同じなのにそれが中々に難しい。「連携」や「協働」が求められる複雑な現代社会。少し子どもの頃を思い出すと気持ちも楽になるのかも? (Y)

発行 東京外国語大学 多言語・多文化教育研究センター  
〒183-8534  
東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟319号室  
Tel 042-330-5441 Fax 042-330-5448  
E-mail tc@tufs.ac.jp  
URL <http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>